

中学校

平成 12 年 度

教育研究員研究報告書

特別活動

東京都教育委員会

平成 12 年 度

教 育 研 究 員 名 簿 (特別活動)

分科会名	区市町村名	学 校 名	氏 名
第 一 分 科 会	品 川	大 崎 中 学 校	横 田 美 紀
	北	豊 島 中 学 校	滝 澤 清 豪
	葛 飾	常 盤 中 学 校	松 浦 猛
	青 梅	吹 上 中 学 校	◎ 清 水 義 彦
	東 村 山	東村山第四中学校	角 屋 仁 志
	国 分 寺	国分寺第二中学校	磯 村 達 夫
第 二 分 科 会	江 東	深川第五中学校	國 分 桃
	世 田 谷	駒 留 中 学 校	堀 井 昭 宏
	豊 島	千登世橋中学校	○ 関 谷 さやか
	練 馬	大泉学園桜中学校	土 田 成 仁
	日 野	日野第四中学校	森 山 央

◎ 世話人 ○ 副世話人

担当 教育庁指導部中学校教育指導課指導主事 稲 葉 秀 哉

研究主題

生徒の自主的・創造的な集団活動を通して

「生きる力」をはぐくむ特別活動の指導の工夫

目次

I	主題設定の理由	2
II	第1分科会	
	「人との豊かな関わりを通して自己を生かす力を育てる学級活動の工夫」	3
1	副主題設定の理由	3
2	研究の内容	4
(1)	研究構想図	4
(2)	「自己を生かす力」を身に付けさせるために	5
(3)	授業研究の実践と検証	7
	〈授業実践1〉	7
	〈授業実践2〉	10
3	研究のまとめと今後の課題	13
III	第2分科会	
	「生徒会の自治的な活動を通して生徒の自主的・実践的な態度をはぐくむ特別活動の工夫」	14
1	副主題設定の理由	14
2	研究の内容	14
(1)	本研究の提案	14
(2)	研究構想図	15
(3)	本研究が提案する生徒会組織図	16
(4)	組織図活用の手順例	16
	〈実践事例1〉	18
	〈実践事例2〉	22
3	研究のまとめと今後の課題	24

I 主題設定の理由

21世紀に入った現在、わが国は、国際化、情報化、高齢化、少子化等の社会の変化が急激に進展しており、生徒たちはそのような社会の変化に主体的に対応していくことがますます重要になっている。

また、人間関係の希薄さや、他人の痛みを知り思いやる心の弱さが指摘されるなか、より良い人間関係をどう作っていくか、自己表現力、他者への思いやりや正義感、連帯感や協力心などをどうはぐくんでいくかが大きな課題となっている。

従ってこれからの学校教育においては、ゆとりの中で特色ある教育を展開し、生徒が豊かな人間性や基礎・基本を身に付け、個性を生かし、自ら学び、自ら考える力などの「生きる力」を養うことが大切である。

特別活動のねらいの中に、子どもたちが互いに人格を尊重し合い、それぞれの個性を認め合い伸ばし合っていく集団活動を通して、自己の個性をよりよく理解し、これを一層伸ばそうとする主体的な態度を育てることがあげられている。

従って、特別活動を今後さらに充実させ、新学習指導要領の特別活動の目標にあるように、生徒は望ましい集団生活を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養い、「生きる力」を身に付けていくことが重要である。

特別活動の内容は学級活動、生徒会活動、学校行事と幅広いが、様々な場面で生徒が他との関わりの中で自己の良さを理解し、他がそれを認め評価することは、生徒が自信を深め、自己の個性を一層伸ばしていこうという態度を育てることにつながっていくと考える。また、それぞれの生徒が自己の個性を発揮していくには、その集団がよく機能した協力的なものであることが必要である。特に生徒会のように大きな集団になると、組織的にしっかりした基盤がないと生徒一人一人が自主的・実践的な態度で取り組むことは難しいからである。

そこで、本研究は、生徒が特別活動を通して「生きる力」をはぐくんでいけるには、

- ・学級においてそれぞれの生徒が自己の良さや個性を理解し、他との関わりを通してさらにそれらを伸ばし生かしていくこと
- ・生徒会活動を活性化し、生徒の自主的・実践的な態度をはぐくむこと

が重要であると考え、上記の研究主題を設定した。

Ⅱ 第1分科会

副主題 「人との豊かな関わりを通して自己を生かす力を育てる学級活動の工夫」

1 副主題設定の理由

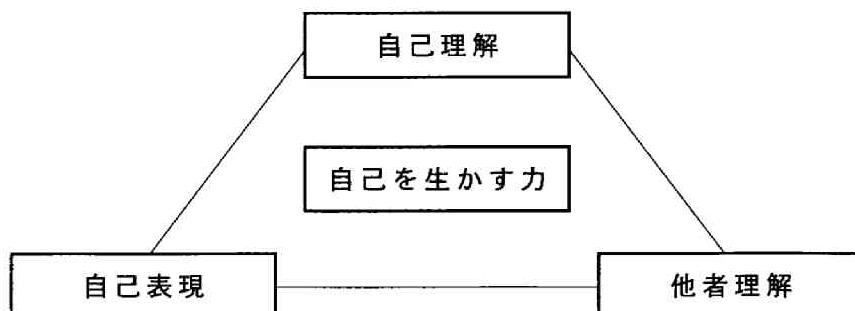
学級は学校生活を送る上で基本となる集団である。各教科の学習活動をはじめとして、行事等でも活動の中心になることが多く、日常的に生徒と生徒、教師と生徒が関わり合っていく場である。

しかし、「現代の青少年は人間関係が希薄である」「他人に共感して思いやる心が弱くなっている」などと指摘されているように、学級での活動においても、生徒と生徒の関わりが仲のよい特定の者に限られてしまったり、自分のこと以外には無関心になりがちだったりすることが見られる。

新学習指導要領の解説の中で、望ましい集団活動として「集団の各成員が互いに人格を尊重し合い、個人を集団に埋没させることなく、それぞれの個性を認め合い、伸ばしていくような活動」と述べられているが、心身共に大きく成長する反面、不安定になりがちな中学生の時期に、自己の個性を知ることや他の人の様々な価値観や良さを知り認めていくことは、将来において社会人として、職業人としてあるいは家庭人として自己の個性を発揮していくための大きな基盤になっていくと考えられる。

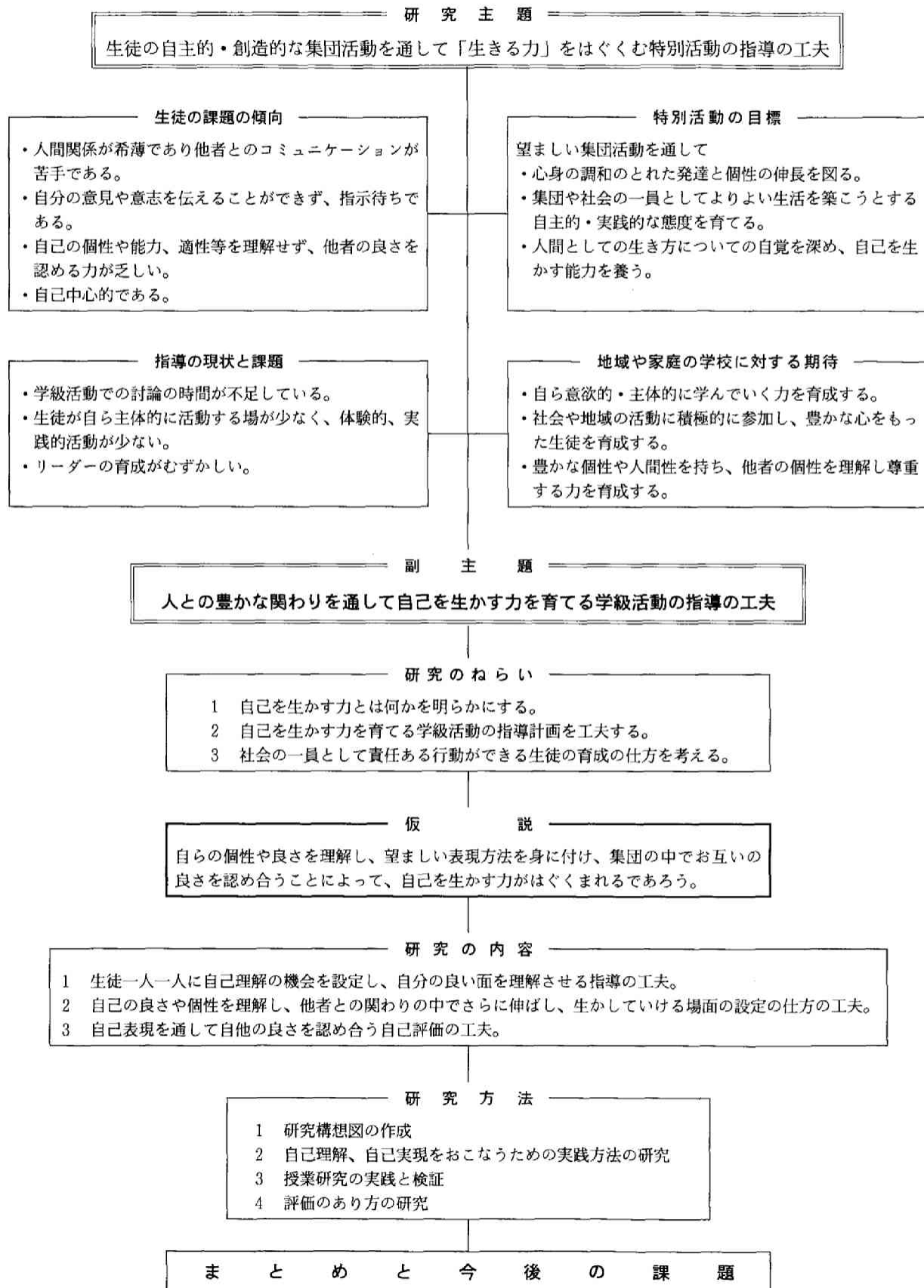
生徒の中には、学校生活の中で活躍の場を得て、生き生きと自己の能力を発揮している生徒がいる一方、本人や他の生徒がその生徒の良さやその能力に気付かなかったり、表現できないために能力が生かされていない生徒も見られる。作文が苦手な生徒でも絵については得意で興味があるといったように個々の生徒には得意、不得意な面や興味関心の違いがある。それらの面に着目し、それらを生かしていくことによって、自主性や創造性を引き出し、伸ばしていけるのではないかと考えられる。また、目立つ活動でなくとも周囲の正しい評価や励ましによって、次の活動のよい動機付けになり、さらに、自己を表現できる機会が生まれてくると考える。

生徒一人一人が自己の個性や適性、長所と短所、興味や関心を知り、周囲の励ましと評価を得ながらそれらを様々な場面、方法で表現することを通して自己を生かす力が育っていくと考え、上記の副主題を設定した。



2 研究の内容

(1) 研究構想図



(2) 「自己を生かす力」を身に付けさせるために

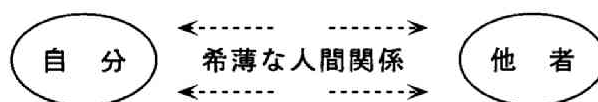
中学生・高校生によるいじめ・不登校・少年犯罪などが、学校内だけの問題ではなく、社会問題としてマスコミを賑わせるようになって久しい。これらの問題は、子どもをとりまく社会環境の変化、少子化、高学歴を求めるための受験の過熱化など、さまざまな要因が関連し合い発生しているものと考えられる。このような状況の中で、新学習指導要領の特別活動の目標が現行の学習指導要領の「集団の一員」から「集団や社会の一員」という文言に改められた。これは、中学生という心身ともに不安定な年齢の時期に、学校生活という集団の中にとどまらず、常に社会の一員という視点を基盤にし、生徒の一人一人の人間性を高めていくことが求められているからだと思われる。

そこで、学校への期待、生徒の現状や学校教育の課題を十分に検討し、我々が最も改善すべきであると考えた課題が、「人間関係の希薄さ」であった。これは日常の各教科や学級活動の中で、生徒同士のかかわりあい薄く、豊かな人間関係をつくる能力が乏しくなっていると感じる場面が多くなってきたからである。では、どのような原因で人間関係が希薄になっていったのか。

今までの人間関係



現在中学生に見られる人間関係



- ①自分の言動に自信がもてず、失敗をして自分自身が傷つくのを恐れる。
- ②他者とかかわる中で、自分同様に他者をも傷つけるのを恐れる。
- ③積極的に活動することで、他者から中傷されるのを恐れる。

そこで、人間関係の希薄さという課題を少なからず改善するために、生徒一人一人の「自己理解」と「他者理解」の認識を深め、集団生活の中で「自己表現」を行っていく力を身に付けさせていく必要性を感じた。まず、「自己理解」を深めさせるためには：

- ①自分の個性をよりよく理解させる。
- ②将来の社会人、あるいは家庭人として、社会の中で自己を正しく生かす能力を養う。
- ③自主的、実践的な態度を養う。

次に、「他者理解」を深めさせるためには：

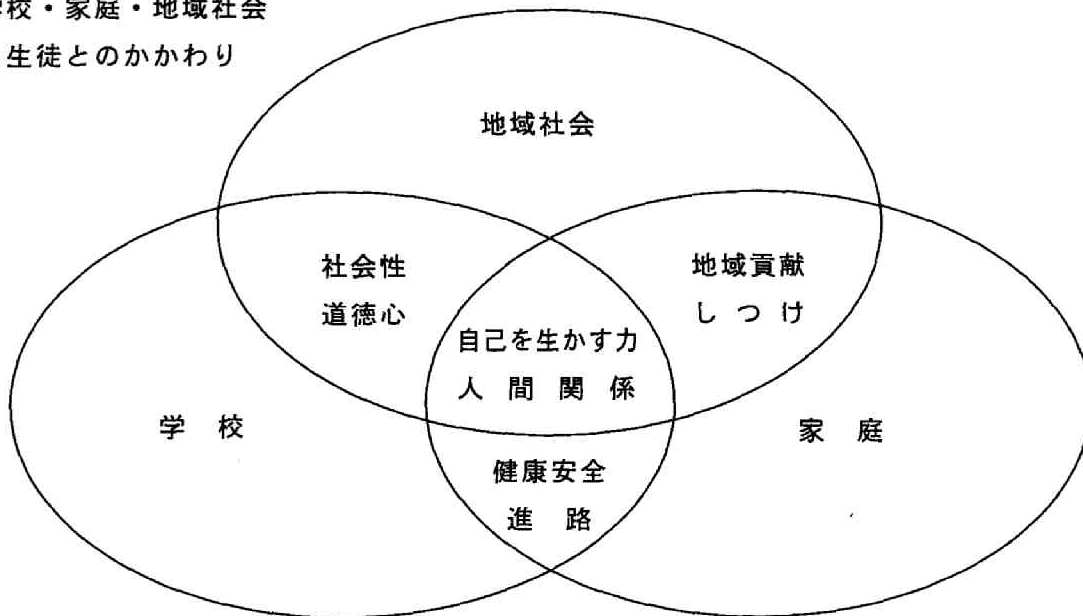
- ①他者の個性を理解し尊重する力を高めさせる。
- ②他者と共に生き相手を思いやる心を深め、社会の一員としての自覚と責任の意識を高めさせる。
- ③集団生活の中で、人間性や帰属感を高めさせ、他者に対する寛容の精神をはぐくむ。

そして、「自己表現」を高めさせるためには：

- ①自己の個性を理解し、自ら判断して自主的に行動し、実践できる能力を養う。
- ②他者の個性を尊重しながら、集団の中で自発的、主体的に判断し、自らの役割を遂行できる力を養う。
- ③将来も家庭や地域社会の一員として、自らの力を望ましいかたちで生かせるよう、豊かな人間性とともに関性を伸長させていく。

「自己理解」と「他者理解」そして「自己表現」は、豊かな人間関係を形成する上で、重要な要素である。それだけでなく将来、自分の主体的な進路選択を行う上で、必要なことであり、これからの人生で何を求めたいかが、自分でわかっていなければならないし、それを表せなければならない。つまり、自分自身についての理解はもちろん、表現する力も伸長していくことが必要なのである。

学校・家庭・地域社会
と生徒とのかかわり



「自己を生かす力」とは、自分勝手に自己満足的な行動を意味するのではなく、自己の個性や適性を十分理解し、創造的にその力を発展・伸長させ、自覚をもち、人間として責任ある行動をとることにより、現在及び将来にわたって、他者からもその力を認められ、協力しながら充実した生活を送ることのできるような能力のことである。自己を生かす力を身に付けさせ、豊かな人間関係をつくらせる取組については、「日本の学校では、人間関係をつくる力が、行事や学級活動を通じて自然に養われてくると考えられていたが、自分や他者そして人間を見つめるというような、子どもたちが生きる喜びを感じられる取組をもっと広げていくべきだ。」(亀口憲治氏：東京大学学校臨床教育研究センター教授 平成12年2月21日付 朝日新聞) という意見もある。今後は、学校教育の中で「豊かな人間関係の確立」をはぐくむ取組を、意欲的に行っていく必要があると思われる。

(3) 授業研究の実践と検証

〈授業実践1：A中学校〉

指導計画

① 題材名 「お互いの良さを発見し認め合おう」

② 題材設定の理由

自己を生かす力をはぐくむには、生徒が自らの個性や能力・適性等を十分に理解し、それらを創造的に発展・伸長させていくことが大切である。しかし中学生の段階では、自分の良さに気付いていなかったり、また気付いていたとしても自信がもてず、自分の良さを発揮できないでいる場合が見られる。

そこで必要なのが、周囲から自分の良さを認められることであろう。人に認められることによって、改めて自分の良さに気付いたり、自信を持って自分の良さを発揮できるようになる場合があるからである。

また、学級活動においては、他者の個性を理解し尊重することを通して、他者への思いやりを深めていくことも必要である。自己中心ではなく、生徒がお互いの良さを認め合い、学級の中で自分の良さを発揮しながら共に成長していく、そのような学級を目指したいと考え、この題材を設定した。

なお本題材では、多くの活動の中から「運動会」と「作品展」を取り上げ、この2つの行事を活用した学級活動を計画した。行事の準備や反省のために学級活動を利用するのではなく、「お互いの良さを認め合う学級活動」の中で2つの行事を活用する、という考えのもとで計画し、実施している。

③ 指導のねらい

- a 友達の良さを発見し、認められるようになる。
- b 自分の良さに気づき、集団の中でそれを発揮できるようになる。

④ 指導の過程

- a 「運動会で活躍した人に拍手を送ろう」～お互いの良さを認め合おう～
- b 「僕・私の作品のココを見て！」～自分の良さをアピールしよう～
- c 「作品展の評価用紙を作ろう」～お互いの良さを認め合おう～・・・本時
- d 「評価用紙に記入しよう」～お互いの良さを認め合おう～

⑤ 本時の活動のテーマ

「作品展の評価用紙を作ろう」～お互いの良さを認め合おう～

⑥ 本時の活動のねらい

評価用紙を作成することによって、お互いの頑張りを発見し、認めていこうという気持ちになる。

⑦ 本時の展開（資料1参照）

⑧ 評価の観点

- a 話し合いに積極的に参加できたか。
- b 作品展でお互いの頑張りを発見し、認めていこうという気持ちになれたか。

⑨ 検証授業の中で見られた課題

事前の活動の中で、自分の良さをアピールする活動（「僕・私の作品のココを見て！」）にあまり時間をかけられなかったため、生徒は、友達が作品展に向けてどんな風に頑張っているのか、どんな工夫をしているのかについて、十分に理解していなかったようである。評価用紙を作る前に、もう少しお互いの頑張りを知り合う時間が必要であったと思われる。

また、研究協議の中で、以下のことが課題として指摘された。

- a 個人で考える時間をもう少し短くできたのではないか。（班での話し合いや最後のまとめにもっと時間をかけたほうが良かったのではないか。）
- b 話し合いがうまく進められていない班があったことが残念であった。
- c 今後の行事に関しても、今回のような活動を継続して欲しい。

（資料1）学級指導案

	学習内容・活動	指導の留意点	評価の観点
指導の開始	<ul style="list-style-type: none"> ・運動会で、お互いを認め合ったことを思い出す。 ・作品展でもお互いを認め合っていくにはどうすればよいか考える。 ・本時の内容を説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・運動会のアンケート（資料2）で、友達のことを認められていたものを紹介する。 ・前もって記入させた『作品展 僕・私の作品のココを見て！』にあるような部分を認めてあげるためにはどんな工夫をすればよいか考えさせる。 ・作品展でのお互いを認め合えるような「賞」を、今度は自分たち自身で考えよう、ということを説明する。 	
活動の展開	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを配布する。（資料3） ・最初に個人で考える。 ・次に班で話し合う。 ・班長が班の意見を発表する。 ・班で決めた賞以外に、自分で考えた賞を2～3つ加えて、評価用紙を完成させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・時間を決めて考えさせる。 ・班長の司会で、班員がそれぞれ自分の考えた賞を出し合い、班の中で3つに絞る。 ・班で考えた賞を黒板に書く。 ・友達の意見をしっかり聞くような雰囲気をつくる。 ・他の班から出た案を取り入れてもよいことを説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・しっかり考えられているか。 ・話し合いがスムーズに行われているか。 ・班長の話をしっかり聞いているか。
活動のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・担任によるまとめ ・ワークシートを提出する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「今日作成した評価用紙を使って、作品展で一人でも多くの頑張りを見せ、認めていこう」ということを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品展でお互いを認めていこうという気持ちになれたか。

(資料2)

運動会での活躍に拍手を送りたい人は？

2年2組 番名前

2週間という短期間で準備をすすめてきた運動会でしたが、みんなの頑張りで、見事成功をおさめることができました。そして全員の方で勝ち取った優勝！先生は、2組のみんな一人一人に拍手を送りたいと思います。

練習期間中に何度か「頑張っている人の姿に気づくことができる人になろうね」「頑張っている人を支えていこうね」という話をしたことを覚えていますか？さてみんなは、どれだけの人の頑張りをを見つけることができたでしょうか？そしてどれだけの人を支えることができたでしょうか？

今日は、自分から見て頑張っていた人に「よく頑張ったね」の気持ちを込めて賞を送りましょう。(自分を推薦しても構いませんよ。) 選んだ理由もしっかり書いて下さいね。

		選んだ理由 (具体的に)
クラスをまとめてくれたで賞		
一生懸命応援したで賞		
係で頑張ったで賞		
最後まであきらめなかったで賞		
いや～すごい！で賞		
ムカデで大活躍で賞		

(資料3)

作品展 評価用紙 ～友達の良さを認め合おう～

	～で「賞」	名前	選んだ理由
班で話し合って決めた賞			
上の3つ以外に入れておきたい賞			

2年2組 () 番

名前

〈授業実践 2 : B 中学校〉

指導計画

① 題材名 「集団の中で自己理解を深め自己を生かす」

② 題材設定の理由

自己を生かす力を育てるには、生徒自身がまず自分の個性や能力を知ることが大切である。しかし、思春期である中学生の段階では、精神的に不安になったり、自己中心的になったり、自分を客観的に見るのが難しい面があるように思われる。また、他からの評価によって自分の思わぬ良さや力が見えたり、自信がもてたりすることもある。

学級活動の中で生徒が人間関係を深めるには自分の良さ、他の人の良さを認め合うことが大切である。そして、他からの評価によってより良い自己の在り方が見いだせる場合もあり、自己理解を深め自己の生き方を探るための機会と考え、題材を設定した。

③ 指導のねらい

自己理解を進める上で、見たことや感じたことを自分の感性で捉えることが重要である。そして、それを自分の得意な表現方法で表すことで積極的かつ創造的な自分自身の能力を引き出すことができる。思いがけない自分の能力を他の生徒が発見し認めることで、自分自身に自信がもて、望ましい人間関係に発展していくことができるようにする。

④ 指導の過程

a 表現方法を探る。

- ・表現方法にはどのようなものがあるのか。
- ・自分の得意な表現は何か。

b 抽象的なものを創造性豊かに表現する。

- ・個人又はグループでテーマについて作品を作る。(約1週間の期間)
- ・テーマ「仲間っていいな」
- ・個人又はグループで得意な表現方法で全員が発表する。(1時間)
- ・お互いに感想を書き、よく表現が伝わったものを各自が選ぶ。(掲示プリント)
- ・選ばれた代表(3～4グループ)が発表する。

c 活躍できる場所を見つける。(ワークシート記入)

- ・表現方法の種類を確認する。
- ・今後の学校生活に生かせるものを発表する。

d 自分を振り返り、自己を見つめる機会を作る。

} 本 時

⑤ 本時のねらい

- a 学校生活の中で表現方法別グループの活躍可能なところをあげる。
- b 自分が活躍できる場所や自己の発見につなげることができるようにする。

⑥ 本時の展開

(資料1参照)

資料 1 学級指導案

	学習内容・活動	指導の留意点	評価の観点
活動の開始	(1) 前回までの流れの確認		
	(2) 本時の内容説明	・前回の発表からの掲示プリントで本日の代表者を指名する。	
活動の展開	(3) 掲示プリントから選ばれた代表者の発表	・個人又はグループで得意な表現方法で発表させる。	・特徴を生かした発表ができたか。
	(4) ワークシートの記入	・他の発表を通してワークシートに感想等を記入させる。	
	(5) ワークシートの発表	・どのような表現方法があるか発表させる。	・創造性豊かな発想があったか。
活動のまとめ	(6) 活躍できる場所・自己の発見	・個人、グループの特徴を生かした活動ができる行事等を考える。 ・他の発表から自分を見つめさせる。	・自分を見つめることができたか。

⑦ 評価

- a 創造性豊かな表現方法による作品が作れたか。
- b 表現方法別グループの活躍可能なところをあげることができたか。
- c 他の発表から自己を見つめ、長所・短所が少しでも発見できたか。

⑧ 授業中に見られた課題

授業に臨むに当たり、分科会内の各校で実践を積んできた。表現方法から自己を見つめていくアプローチは自分の意外な部分を発見したりできる機会と捉えた。生徒の発想を豊かなものにしていくためには、より多くの時間が必要であったと思われる。実践からの課題として次の点が明らかになった。

- a 生徒の発想の展開には、より多くの時間が必要とされる。
- b テーマの工夫（軽いものから重いものへ）
- c 評価の方法（次の活動につながるように具体的に行う）

3 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

今回の研究では、学級という集団の中での人とのかかわり合いを通し、自己を生かす力を育てる学級活動を追究した。形式が違う研究授業を2回行ったが、どちらも生徒がお互いの良さを認め合う活動を通して豊かな人間関係を築くとともに、自分の良さに気付き、または自信をもち、それをこれからの学校生活に生かしていくことが目的の授業となった。

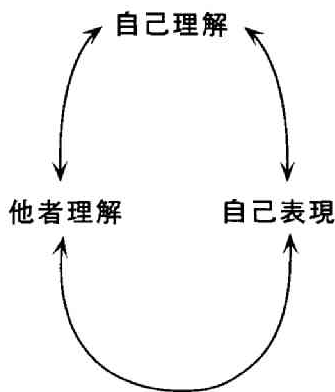
〈授業実践1〉

- ア 生徒が意欲的に活動している行事を通してお互いを認め合えるように、行事の前後に学級活動の時間を設定した。
- イ 今回の授業は運動会から作品展という全く異なる行事間をつなぐ授業として位置付けた。
- ウ この授業の前段階として運動会での取組があり、そこでお互いの活躍を認め合う経験があったため、自分の作品の見てほしいところを全員が主張できていた。また、その主張を認め合う雰囲気もできていた。
- エ 全員分の主張を学級だよりにしたのは効果的であったが、一人一人の主張をもう少し時間をかけて理解し合えるとよい。
- オ 1つの行事だけで終わらせることなく、1年間を通してこのような学級活動を行っていくことが大切である。

〈授業実践2〉

- ア 3年間の学級活動の中でどの時期に行ってもよいものを考えた。
- イ 表現することを通し豊かな人間関係を築く授業だが、これをきっかけにして様々な取組へと発展させていける。(例えば、宿泊行事や進路指導など)
- ウ テーマは学級の現状に合わせて変えていく必要がある。
- エ もう少し時間をとり、一人一人が表現にどう取り組んだかを掘り下げていく必要がある。
- オ 最後の自分を見つめさせる部分は、「自分の良さをどう発揮していくか」に変えてもよい。

(2) 今後の課題



「自己理解」「自己表現」「他者理解」は個々でも大切な活動だが、左の図のようにお互い関連し合い、繰り返し行うことによってさらに効果が上がると思われる。

しかし、現在の特別活動は、年間計画を立ててはいるものの行事のために使われることが多い傾向がある。

今回の研究で得たことは1回の授業や指導よりも、1年間継続して学級活動を行えばより良い成果が生まれてくるということである。行事などを有効に活用しながら計画的に指導していきけるように今後も研究を続け、自己を生かす力を育てることのできる学級をめざしていきたい。

Ⅲ 第2分科会

副主題

「生徒会の自治的な活動を通して生徒の自主的・実践的な態度をはぐくむ特別活動の工夫」

1 副主題設定の理由

生徒の学校生活の中で、生徒会活動が占める割合は大きい。生徒は日常、委員会活動や行事などの様々な生徒会活動にかかわっている。従って、生徒会が組織として自治的な活動を展開し、そこに生徒が主体的にかかわる機会を多くすることによって、生徒のより自主的・実践的な態度をはぐくむことができると考え、本副主題を設定した。

第2分科会は、生徒会が自治的な活動を展開できるようになるためには、次の2点が重要であると考えた。

- (1) 生徒会本部役員（リーダー）の育成
- (2) 生徒会の連絡調整に関する機能の充実

生徒会という大きな集団では、まずリーダーとなる本部役員の精力的な活動が必要となる。しかし、本部役員だけが精力的に取り組んでも集団は活性化しない。そこで2番目の連絡調整機能の充実が重要となる。つまり、生徒会の組織をより機能的な構成に改編することにより、本部の方向性が各学級まで行き渡り、それによって生徒一人一人の考えが全体に反映されるようになる。このような相互作用が自治的な生徒会活動へとつながり、何事にも意欲的に取り組もうとする態度の育成につながると考えた。

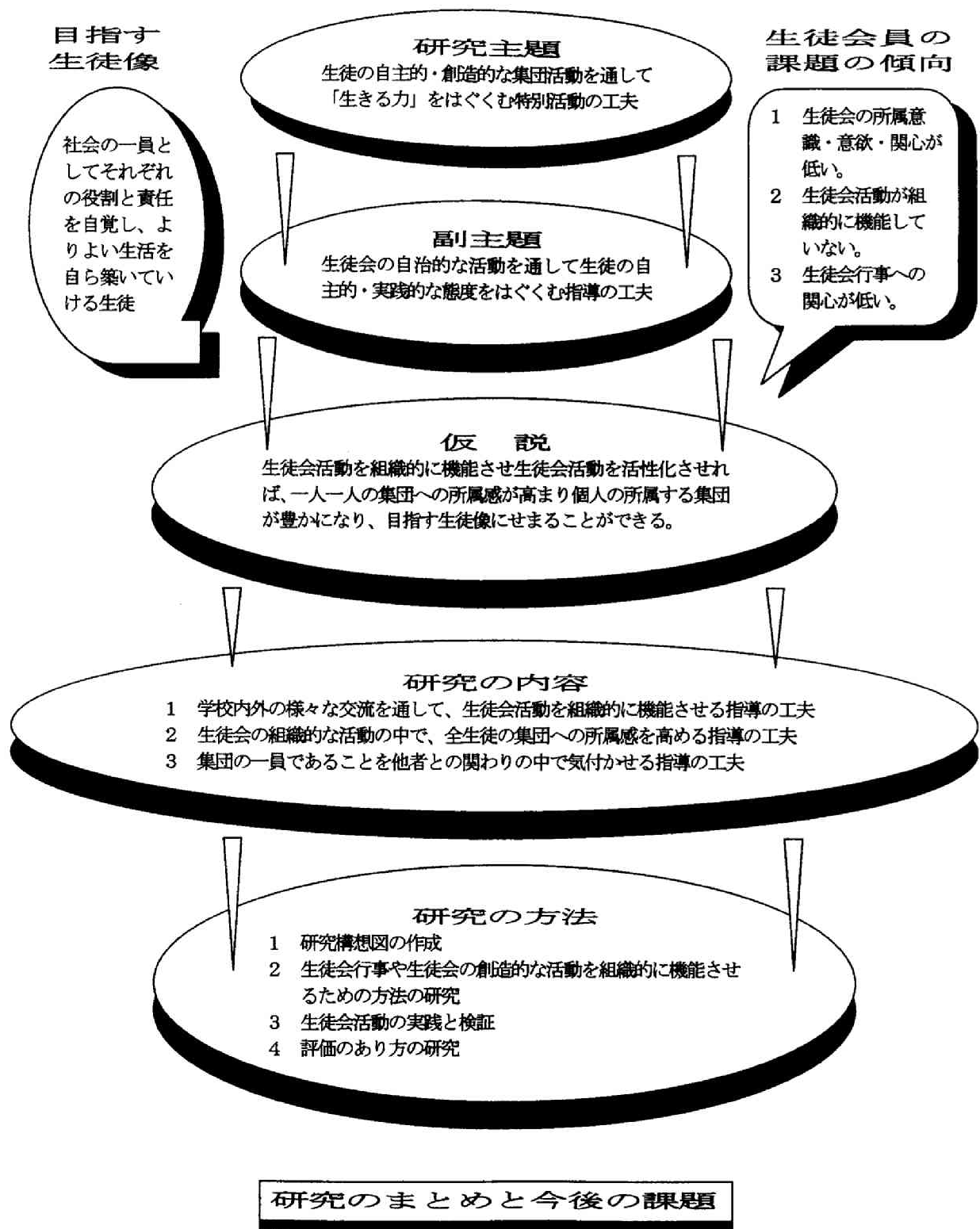
2 研究の内容

(1) 本研究の提案

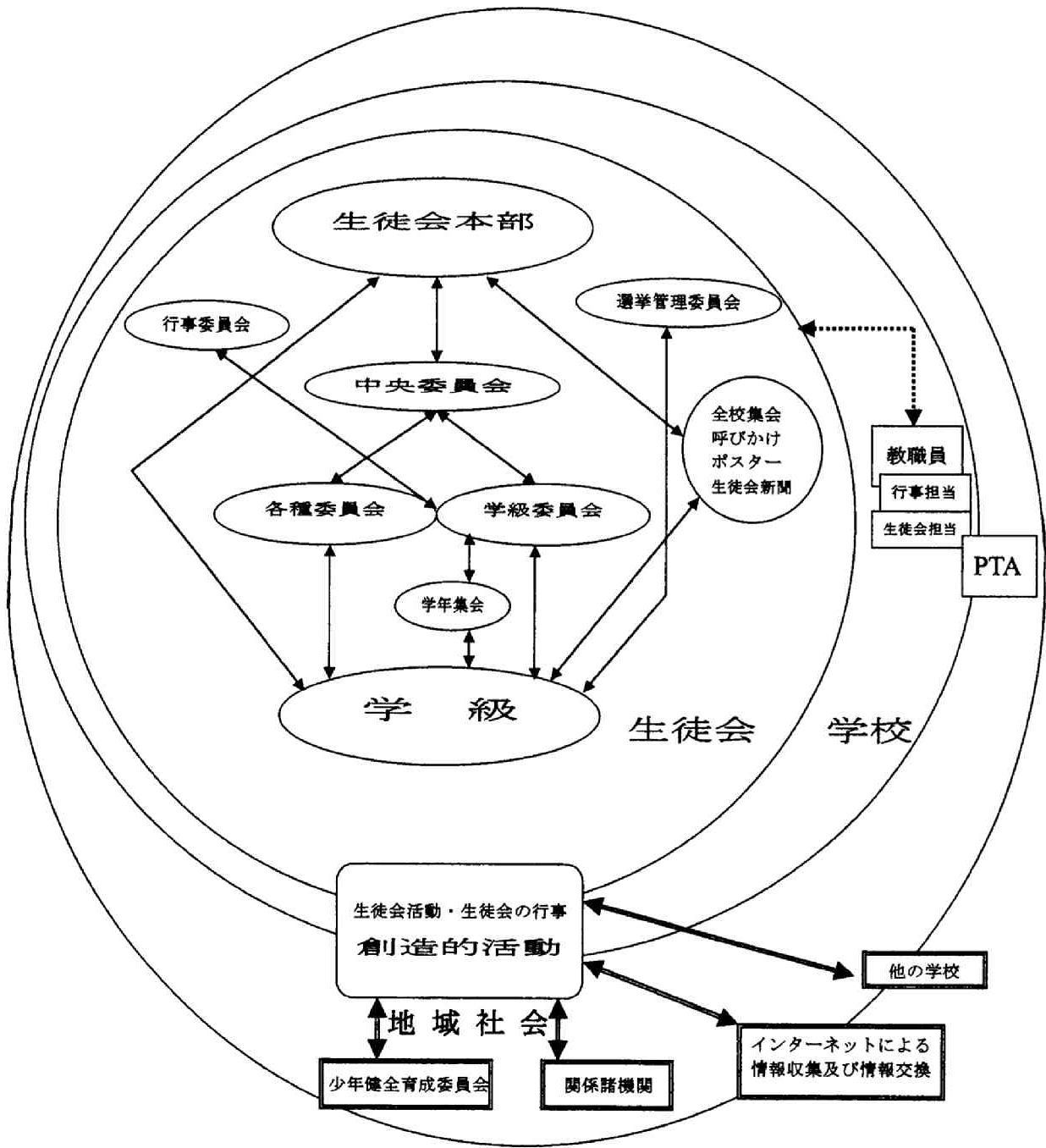
生徒会活性化のためのキーワードは、「生徒の自主的・実践的な態度をはぐくむこと」である。しかし、現状は「生徒会といえば本部役員が中心に活動する」という考えが生徒の間では強く、一人一人の生徒の生徒会への所属意識が低い傾向がある。また、これまでの生徒会組織は、得てして横並びであることが多かった。つまり、本部、各種委員会、学級、学年がそれぞれ独自に活動し、お互いに連携し合うといった関係が弱かった。

そこで第2分科会はp.16のような生徒会組織図を考案し、それにもとづく生徒会活動の活性化の方策を考えた。全ての生徒会活動を本部役員を中心とする中央委員会でもとめるのである。中央委員会での話し合いは学級委員が各学級に伝え、また、各学級での意見は学級委員が中央委員会に届け、その結果をもち帰るといった相互作用を、より活性化することが大切である。それにより生徒一人一人の生徒会活動への取組の意欲が増し、その繰り返しから生徒の自主的・実践的な態度がはぐくまれるのである。そして各種行事もできるだけ各種委員会や学級が役割を分担し、それぞれが活躍できる場を設けていくことで生徒会は活性化すると考える。第2分科会は2校の事例をもとに、この組織図を活用した生徒会活動の取組の在り方を提案する。

(2) 研究構想図



(3) 本研究会が提案する生徒会組織図



(4) 組織図活用の手順例（概要）

ア 生徒総会に向けて（詳細は実践事例1参照）

- ① 選挙管理委員会
- ② 学級討議（立候補者の選出）
- ③ 生徒会選挙（選出後、本部役員による生徒会目標の考案）
- ④ 第1回学級討議（各種委員決め）
- ⑤ 第1回各種委員会（本部役員によるファーストミーティングと三役決め）

⑥ 第1回中央委員会（顔合わせと生徒会目標の検討・承認）

※ 全ての生徒会活動は、本部の提案した生徒会目標を中央委員会で承認し、それをもとに行われる。また各種委員会の方針、具体的な活動は、生徒会目標に準じたものとする。

⑦ 第2回各種委員会（生徒会目標を受けての方針案・具体的な活動決め）

⑧ 本部役員による議案書作り

⑨ 第2回学級討議（議案書討議）

⑩ 第2回中央委員会（質問・意見の検討）

※ 学級から上がってきた質問・意見に対し、そのまま各種委員会に受け渡すのではなく、まず中央委員会で検討し、その場で却下された意見に対しては学級委員が各学級で対応し、有意義な意見のみ各種委員会で検討してもらおうという手順を踏むことが大切である。

⑪ 第3回各種委員会（質問・意見に対する回答討議）

⑫ 回答書の作成（本部役員）と配布（学級委員）→ 学級へ

⑬ 質問・意見を発表する生徒の打ち合わせ

⑭ 議長団会議（議長団は一般公募でも中央委員会の議長でも良い）→承認は生徒総会

⑮ 第3回中央委員会（生徒総会リハーサル）

⑯ 生徒総会

イ 地域社会との連携（詳細は実践事例2参照）

① 地域社会の関係諸機関から生徒会への参加要請

② 本部役員による企画考案

③ 第1回中央委員会（概要の説明と承認、広報活動の依頼）

※ 常に本部の提案を中央委員会で検討し、各種・学級委員会や学級に下ろしていく。

④ 第1回学級会（参加者の募集確認）

⑤ 第1回各種委員会（各分野の特性を生かした活動の考案）

⑥ 第2回中央委員会（参加者人数確認、各種活動の検討）

※ 学級や各種委員会から上げられた意見を中央委員会で集約し生かしていく。

⑦ 第2回学級会（中央委員会の結果の報告）

⑧ 当日の第1回参加者ミーティング（地域社会の関係諸機関の方を含む）

⑨ 第3回中央委員会（最終確認）

⑩ 第2回参加者ミーティング（最終確認）

⑪ 当日までの準備

⑫ 当日の活動

⑬ 活動の報告

〈実践事例1：C中学校〉生徒会組織図を活用した生徒総会

本校の生徒会活動は、毎年1回行われる役員選挙で多数の立候補者の中から選出された役員を中心にしている。そのため役員たちの意識は高く、熱心に活動している。しかし実際は生徒会全体が組織的に機能しておらず、せっかくの役員たちの意識が各生徒まで伝わらず、各生徒も生徒会の一員であるという自覚が弱い。そこで、10月に発足した新生徒会本部を中心とし、組織的に生徒会全体を活性化させることを目的として、組織図を活用した生徒総会を実践することにした。

(1) 生徒総会までの流れ

生徒総会は1年に前期と後期の計2回行われている。後期は役員選挙のすぐ後に開かれるが、その後の生徒会本部や専門（各種）委員会の活動方針を決定するものである。役員選挙から生徒総会までの流れは次の通りである。

- ① 生徒会選挙 … 選挙管理委員会の運営による。
- ② 第1回学級討議…専門委員決めを行った。
- ③ 本部役員による生徒会目標の提案 「やるなら今～未来を大切にするために～」
これまでの生徒総会の流れでは、生徒会目標は専門委員会のスローガンと同時期に、総会の議案書として誌面で発表されていた。そのため、専門委員会からは独立した目標としてとらえられることが多かったのだが、今回の生徒総会では役員会の意思が専門委員会の活動を通じて一般生徒に伝わるように、早めに検討を開始した。
- ④ 第1回専門委員会 … 生徒会本部と各専門委員会のつながりを強くするために、役員が司会進行をし、自己紹介・委員長の選出等をすべて生徒だけで行った。また、役員だけではすべての委員会を担当しきれないので、前期役員に手伝ってもらった。（資料2）
- ⑤ 第1回中央委員会 … 役員、④で選出された各専門委員長、各学級からの代表者（代表委員）による初めての顔合わせとなった。始めに自己紹介と議長の選出を行った後、役員会から今期の生徒会目標「やるなら今」が提案され、検討の後承認された。その結果専門委員長に次の専門委員会で、この生徒会目標に基づいたスローガン・活動目標・活動内容が検討されることが依頼された。（資料1）
- ⑥ 第2回専門委員会 … ⑤で提案された生徒会目標「やるなら今」を受けて、各委員会で具体的なスローガン・活動方針・活動内容が検討された。
- ⑦ 第2回中央委員会 … 専門委員長が⑥での決定事項を発表した。また役員会からは、各クラスの代表委員に対して学級討議のもち方についての説明があった。学級討議も生徒だけの運営で行えるよう、資料を役員会が作成し（資料3）配布した。本部役員はその後、生徒会目標と各種委員会のスローガン活動方針等をまとめた議案書を作成した。
- ⑧ 第2回学級討議 … この学級討議は、生徒総会の前段階として位置付けられている。そのため学級討議での質問事項・意見等は、各学級の意見として生徒総会で発言される。生徒総会当日の、思いつきや場を盛り上げようとする意図での発言をなくし、総会をスリム化するためにも、学級討議のもつ重要性を代表委員が各生徒に理解してもらえよう呼びかけた。その後、議案書に対しての質問や意見・要望についての話し合いが行われた。
- ⑨ 第3回中央委員会 … 各学級から出てきた質問や意見・要望等を発表し、役員会・専門-

委員長に回答を依頼した。この段階で、生徒総会での意見としてふさわしくないものや、学級で重複しているものを選別した。

- ⑩ 第3回専門委員会 … 各学級から出た質問や意見・要望への回答を討議した。
- ⑪ 第4回中央委員会 … 各学級へ発言が依頼された。
- ⑫ 第3回学級討議 … 発言者が決定された。
- ⑬ 議長団会議 … 今回の生徒総会では議長団の立候補が出ない場合には、中央委員会で選出した議長が議長団をつとめることになっていたもので、事前に打ち合わせを行った。その後中央委員会参加者及び発言者による総会リハーサルが行われた。
- ⑭ 生徒総会

生徒会本部	中央委員会	専門委員会	学級活動
① 生徒会役員選挙（選挙管理委員会）			
③役員顔合わせ 本部方針の検討	⑤第1回（組織決定・ 本部方針説明） ⑦第2回 （学級討議の持ち方） ⑨第3回 （質問内容の精選） ⑪第4回 （発言者の依頼） ⑬第5回（リハーサル）	④第1回（組織作り） ⑥第2回（活動方針決定） ⑩第3回（質問への回答）	②学活（専門委員決め） ⑧学級討議 （質問・意見・要望） ⑫学活（代表者の決定）
⑭ 生 徒 総 会			

(2) リーダーの育成

生徒会の自治力を育てるために必要になってくるのがリーダーへの指導である。専門委員会や学級活動において、生徒が自分たちの力で生徒会活動を行っているという認識をもたせるためにも、各種活動における教員の援助は最小限にとどめ、活動前やその後のリーダーへの指導を大切に、活動中はできるだけ生徒主導としたい。そのためにもリーダーとなる本部役員へは常に全体の流れを把握させ、見通しをもって活動させると同時に、方法がある程度マニュアル化しておく必要がある。生徒会活動のリーダーである役員と、委員会活動のリーダーである

委員長、学級活動のリーダーである代表委員の連絡調整がスムーズにいけば、お互いの活動を助け合い、自治の力も育ってくると考えられるからである。

また、生徒会顧問は、職員会等を通して、生徒会活動の進行状況を全員の教職員が把握できるよう努めることが大切である。

(3) まとめ

今回の実践事例は、校内における組織の交流を今まで以上に活用し、生徒の自治の力を発揮させることがねらいであった。事前準備、リーダーとの打ち合わせ等、時間や手間はかかるものの、生徒たちが生き生きと活動する姿が見られるようになった。

〈生徒の感想〉

「私たちは、生徒総会の日まで、スローガンを決めたり、その設定理由を決めたり、自分たちがどの委員会を担当するのかなどを決め、みんなで一生懸命協力して仕事をしていました。その中で、私は生活委員会の担当をして、2回目の専門委員会で、生活委員会のスローガンと活動方針・活動内容を決めてもらうとき、役員会がどうしてこのスローガンをたてたのかを説明するのにとても緊張しました。でも、その委員会では『いいスローガンだね。』と言われたりしました。また、学級討議の時は、新代表委員が話を進めてくれ、私も役員会の説明や、各委員会への質問に集中できてとても楽しかったです。そのため、学級の各委員もいろいろな質問の応答にそなえてがんばっていました。」(1年書記)

(資料1) 生徒会目標

第一回中央委員会 2000. 10. 3
生徒会新聞

本部スローガン

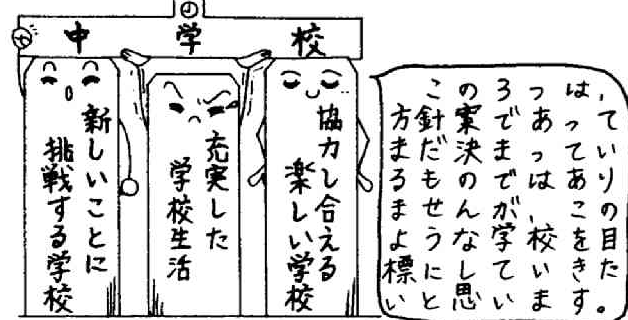
「やるなら今」
～未来を大切にするために～

このスローガンを口にした瞬間、口を動かすだけで、目的意識がわいてくる。このスローガンを口にした瞬間、口を動かすだけで、目的意識がわいてくる。このスローガンを口にした瞬間、口を動かすだけで、目的意識がわいてくる。

各委員会へ

各委員会の活動方針を、具体的な活動方針として、各委員会に伝える。

今回生徒会では主に3つの目標を柱にしていきたいと思っております。



中央委員会の心得

- 代表委員は、中央委員会が出たことを、各委員会に伝えること。
- 出てくる意見をよく聞き、集中して話し合うこと。
- 皆が生徒会であることを自覚すること。
- 自分が学級・委員会の代表だということ、これを忘れないこと。

by 生徒会.

(資料3) 学級討議の進め方

学級討議の進め方

日時 10月13日(金) 3,4校時

1. 議案書を完成させます。⇒ 印刷した議案書を配布しますので、当日ホチキスを持参してとじてもらって下さい。
 2. 前期の活動内容の反省は、各自が目を通しておくようにして下さい。
 3. 議案書の中の気になった点などは、あらかじめメモしておいて下さい。
 4. 生徒会の本部方針は、代表委員もしくは生徒会役員に読んで、説明してもらいます。
 5. 各専門委員会から出ている活動方針は、その専門委員に説明してもらいます。
 6. 生徒総会と学級討議の注意点についての説明 ⇒
 - ・説明できるものは、各委員会で説明してもらいます。
 - ・生徒総会当日での思いつきの意見は、認められません。
 - ・当日の質疑の中で"の意見はがまいませんが、意見の内容は、学校生活の向上を目的としたものに限りです。
 7. 生徒会本部や、各専門委員 ⇒
 - ・答えられる場合は、その場で答えて下さい。
 - ・答えられない場合は、用紙に記入して、各委員会へ持ち返して下さい。
- * もしも意見が出ない場合は、担任の先生と相談して、グループ討議などに切り替えて下さい。
8. 学級討議の日の午後、中央委員会を開く予定なので、代表委員が質問を整理し、集約して用紙に記入し、持参して下さい。

生徒会本部

(資料2) 第1回 一斉委員会

第1回 一斉委員会

2000.10.3

「起立。第1回 専門委員会を始めます。気をつけ、礼。着席」

「今日の第1回委員会の司会進行をつとめます。役職名 名前 です。スムーズに議事を進行させるためにもご協力よろしくお願いします。」

「はじめに自己紹介をお願いします。クラス、名前と意気込みをお願いします。3年生からお願いします。」

「ありがとうございました。」

「それでは、今期の○○委員会の委員長他必要な役職を決めたいと思います。委員長は2年生から1名です。基本的にはそのほか副委員長として、各学年より1名の選出をお願いします。そのほか書記等は各委員会で独自に決めていいことになっていますので、必要があれば決めたいと思います。」

「それでは、委員長に立候補する人はいますか。」

- 立候補者が1名の場合 → 顧問の先生の承諾ができれば決定
- 立候補者が複数の場合 → 顧問の先生の指示で所信演説後に投票で決定
- 立候補者がいない場合 → 推薦してもらう。
 - 推薦者が1名の場合 → 顧問の先生の承諾ができれば決定
 - 推薦者が2名以上の場合 → 顧問の先生の指示で所信演説後に投票で決定

<同様にして、副委員長(学年代表者)を決定する。>

「本日の議事は以上になっています。委員長はこの後開かれる中央委員会に参加してください。あさっての一斉委員会では、各委員会のスローガン・活動方針・活動内容などを決めます。委員のみなさんも、事前に案を作成しておいてください。」

「先生から何かありますか。」

「以上で本日の専門委員会を終了します。ご協力ありがとうございました。」

第1回	委員会	担当	_____
・委員長	_____年_____組	氏名	_____
・副委員長	_____年_____組	氏名	_____
	_____年_____組	氏名	_____
	_____年_____組	氏名	_____
・()	_____年_____組	氏名	_____

顧問の先生のサイン _____

〈実践事例2：D中学校〉生徒会組織図を活用した外部機関との連携

本校には平成11年6月に空き教室を利用した保育園（分園）が開園した。生徒達は普段の学校生活の中で園児と接することもある。そこで、保育園との交流活動を通して、学校、家庭、地域社会との連携を進め、学校や地域社会の一員として、よりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるために、保育園と話を進めてきた。

また、生徒会の中央委員会を活用して、生徒会活動をより組織的に活性化させるために、保育園運動会交流会を実践することにした。

(1) 保育園運動会交流会までの流れ

事前に保育園と中学校で、おおまかな活動内容について話し合いを行う。

生徒会本部役員会・・・担当教員が本部役員に概要を説明し、本部役員は具体的に企画を立案する。

第1回中央委員会・・・本部役員会からの原案をもとに話し合いを進め、委員会単位でできる活動を話し合ってもらいたいこと、当日参加できる生徒については申込をしてもらうことを確認する。

各学級で・・・各学級の中央委員がクラスに運動会交流会の概要を説明する。また、本部役員会が作成した申込プリントをもとにして、運動会当日に参加できる生徒を募集することを連絡する。

・・・放送部が中央委員会からの依頼を受けて、昼の放送で広報活動を行う。

専門委員会・学年委員会・・・運動会で、できることについて話し合いをする。

生徒朝会・・・本部役員会から運動会当日参加できる生徒の最終呼びかけを行う。

第2回中央委員会・・・各専門委員会で話し合われたことの報告をし、重複している内容などについて調整を行う。

当日参加生徒打ち合わせ会・・・運動会のプログラムの確認をし、参加生徒のグループ作りと仕事分担を行う。また、保育園側より、幼児との接し方についての指導を受ける。

各学級で・・・各学級の中央委員がクラスに第2回中央委員会で話し合われたことを連絡する。

専門委員会・学年委員会 第2回中央委員会で決定した活動内容について報告をし、具体的な活動方法について話し合う。

当日参加生徒打ち合わせ会・・・集合時間、持ち物、活動内容等の最終確認を行う。

専門委員会・学年委員会・・・各委員会ごとに運動会前日準備を行う。

運動会当日・・・保育園職員と同じ時間に集合し、活動していく。運動会終了後、保育園職員と片づけを行い、昼食を食べながら談話をする。

生徒会本部役員・・・参加生徒から感想文を回収し、生徒朝会で報告する内容をまとめる。

生徒朝会・・・生徒会本部役員が生徒朝会で運動会交流会の報告をする。

(2) 具体的な活動内容

運動会前日までの活動

各委員会	参加数	活動内容
生徒会本部役員会	7名	<ul style="list-style-type: none"> • 全体の企画をし、中央委員会に提案する。 • 運動会当日に参加できる生徒を募集するプリントを作成する。
中央委員会	24名	<ul style="list-style-type: none"> • 生徒会本部役員会からの提案を討議する。 • 各委員会、各学級に話し合われた内容を連絡する。 • 放送部に昼の放送で広報活動をするよう依頼する。
1年学年委員会	0名	<ul style="list-style-type: none"> • 学年行事で多忙なため、活動は見合わせる。
2年学年委員会	12名	<ul style="list-style-type: none"> • 縦90cm×横270cmの白色段ボールを使って、横断幕の作成を行う。
3年学年委員会	12名	<ul style="list-style-type: none"> • 当日参加できる生徒が多くなるように、3年生に呼びかけを継続的に行う。
生活委員会	20名	<ul style="list-style-type: none"> • 生活委員としては、特定の活動内容が話し合えなかったため、他の委員会で人数が必要なところに人材派遣をする。
体育委員会	20名	<ul style="list-style-type: none"> • 本部テント設営と本部席の机・椅子の準備を行う。
整美委員会	20名	<ul style="list-style-type: none"> • 校庭の小石を拾い、ブラシをかけてグラウンドを整備する。 • 校門付近の清掃を行う。
保健委員会	10名	<ul style="list-style-type: none"> • 校庭の周囲にある水飲み場の清掃と石鹸の取り替えを行う。
選挙管理委員会	0名	<ul style="list-style-type: none"> • 生徒会選挙に関する活動が多忙なため、活動は見合わせる。
図書委員会	20名	<ul style="list-style-type: none"> • トイレの清掃と、保護者がトイレまで土足のままで行けるように昇降口と廊下にシートを敷く。
きまり検討委員会	20名	<ul style="list-style-type: none"> • 駐輪場になる中庭の清掃とライン引きを行う。

当日の活動

各委員会	参加数	活動内容
生徒会本部役員会	7名	<ul style="list-style-type: none"> • 当日の活動のようすをデジタルカメラで記録する。後日このデータを利用して本校ホームページの『生徒会の活動』にアップする予定である。
体育委員会	16名	<ul style="list-style-type: none"> • 駐輪場で、保護者が乗ってくる自転車の誘導を行う。 • 競技ごとに使用する用具の出し入れを行う。 • 本部テント等の会場設営を行う。
個人で申し込んだ生徒	31名	<ul style="list-style-type: none"> • 競技中の園児の誘導を行う。 • 水飲み場での園児への援助および、巡回を行う。 • 競技中の園児への応援をする。

3 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

本研究は、まず主題を受けて、生徒の「生きる力」をはぐくむために何が必要かを考えた。その際、生徒一人一人が生徒会活動に積極的に取り組めるようになれば自主的・実践的な態度が養われ、それが将来何事にも進んで参加しようとする意欲につながると考えた。そこで副主題が設定されたのである。この副主題を設定するにあたって、集団にばかり着眼してしまい、生徒一人一人への働きかけがなかなか見えてこなかった。幾度も話し合いをする過程で、本部役員の育成はもちろん、中央委員会を中心とする、生徒会の連絡調整機関の充実が、所属感を増し、進んで取り組もうとする意欲につながることが実証できた。本研究の留意点として、①生徒会は全生徒によって組織されるという意識がもてるようにした。②組織図の活用の手順を明確化した。③生徒一人一人の意見が反映される生徒会活動ができるように工夫した、の3点である。その成果は以下の通りである。

ア ①について、本部役員の提案をすぐに全生徒に流すのではなく、必ず中央委員会で検討し、学級委員を通して各学級に伝えた。そのことにより中央委員会の役割が明らかになり、生徒会への所属感が増した。

イ ②について、これまで滞りがちであったガイダンス機能がスムーズに行えるようになった。その結果、時間の短縮や、新しい企画の取組など、生徒会活動の充実へとつながった。

ウ ③について、中央委員会と一人一人の生徒との相互のかかわりによって生徒会活動が成り立っているということを実感した生徒が多かった。このことは集団の活性化にとって最も重要であった。そして、進んで生徒会活動に参加しようとする生徒の増加が、生徒会活動以外の学校生活にも良い形となって現れるようになった。

(2) 今後の課題

今後の課題としてはガイダンス機能の充実がある。生徒にどれだけ活動させるのか。その範囲はどうするのか。マナー化を防ぐためにはどうするのかなどの問題にかかわって、生徒への教師の適切な助言が必要不可欠である。教師の適切な助言により、時間の短縮はもちろん、取組の内容の充実にもつながる。今後は、生徒会活動においてどのようなガイダンス機能が適切なのかを探ることが求められると考える。

生徒会活動を通して「生きる力」をはぐくむためには、様々な活動を、年間を通して、また、中学校一年生から三年生までの成長を展望した長期の継続的な活動にしていく必要がある。このことを踏まえ、更に自主的・実践的に生徒が活躍できるような計画的な生徒会活動の在り方を追究していきたいと考えている。